

東北ヘルプ ニュースレター 2019年夏号

- 巻頭言：「9年目」の東北ヘルプ事務局報告 1～5頁
- ワイズメイズクラブ国際協会第28回アジア太平洋大会に参加して 6～8頁
- 国内災害対策フォーラムに参加して 9～10頁
- 気仙沼 障がい児支援の展開 11～12頁
- 支援の終わり／支援の稔り 13～16頁
- 原子力災害の減災に向けて 17～18頁
- 献金感謝・会計報告・活動計算書（2018年度決算書） 19～22頁

左：増築中の気仙沼障がい児施設「ほっぷ」

右：2019年8月6日の広島平和記念公園



巻頭言 「9年目」の東北ヘルプ事務局報告

三重災害（地震・津波・原子力災害）の被災地は、「9年目」の日々を過ごしています。

「復興予算」は“10年”で終了の予定です。その後、いったいどうなるのか。いよいよ響き渡る復旧工事の槌音に、被災後の日常を生きる人々は静かな不安を覚えています。

全国・全世界の祈りによって、東北ヘルプは今も活動を続けています。「10年」を超える働きを、担わせていただけるかどうか。毎年が、挑戦です。

東北ヘルプ事務局より、以下の通り、最新の報告をいたします。覚えてお祈りいただければ幸いです。

（2019年8月15日 事務局長 記）

1. 運営報告

2018年度の「NPO法人 東北ヘルプ」総会が、2019年6月24日に行われました。後掲します「活動計算書」に詳細がございます通り、2018年度の献金総額は約930万円（9,395,309円）でした。まことに感謝なことでした。しかし、この金額は2017年度の献金総額である約1,200万円（12,044,265円）に対して、約3割の減少となりました。

実は、この3年間、毎年約3割の献金額減少が確認されています。実際、今月の理事会で報告された今年度の数字を取り出してみましても、次ページにお示しします「表」のようになります。

献金は「数千円」という“小口”（それでも大きなものです）がほとんどです。今もお支え下さる方はまだ多く、その祈りは確かに熱い。それゆえにこそ、現実の数字を前に、私たちが祈りを熱く重ねなければならないと思われています。

支出の削減も、成果を上げつつあります（「表」の上段右端をご覧ください）。人件費の削減により、お礼状の発行やニュースレターの発刊に関わる人的資力に不足が生じ、結果として募金活動が弱っていることを思います。しかし、それでも応援して下さる方がいる。できることは何でも、取り組もうと思っています。皆様のご指導とご加禱を、希う次第です。

表

	2018年			2019年(7/29 理事会報告速報値)		
	入金件数	収入金額	支出金額	入金件数	収入金額	支出金額
4月	79	1,422,509	847,683	36	846,679	842,310
5月	36	463,001	747,137	25	574,367	437,443
6月	22	591,909	915,039	22	320,250	709,953
7月	55	677,968	949,043	19	310,415	681,573
合計	192	3,155,387	3,458,902	102	2,051,711	2,671,279
				47% 減	35% 減	23% 減
前年比						

残預金(7月29日現在)	
振込口座	772,043 円
一般通帳	44,686 円
扶助基金	277,942 円
仮払金	100,000 円(川上)
仮払金	100,000 円(旭丘)
仮払金	100,000 円(渡波)
合計	1,394,671 円

2. 活動報告

東北ヘルプの事業は、大きく分けて三つに分かれます。津波被災地支援、原子力災害支援、そして情報発信です。

(1) 津波被災地支援

津波の被災地は、急速に「終息」しつつあります。「被災地」という言葉は、だんだんとなじまなくなりつつある、とも感じるので。

しかしそこには「被災後の日常」がありません。例えば、津波被災地の基幹産業であった水産業者を見れば、震災前と比べて実に「約3割」が倒産したといえます。復興補助金の償還（つまり借金の返済）も、昨年あたりから始まり、何とか立ち上がった水産加工業

者の「約半数」が経営危機に陥っていると報じられています。そして、多くの人に「当面の仕事」を供給してくれた復興工事にも終わりが見えてきました。つまり、「貧困」が、被災後の日常を覆いつつあるのです。

今、私たち東北ヘルプは「扶助基金」などを有効活用し、また「反貧困みやぎネットワーク」などの地域の取り組みと連携して、「貧困という被災後の日常」への対応を始めています。

(2) 原子力災害支援

原子力災害は、深く重く長く、私たちの課題となって見えます。その実情を知ること自体が、決して容易ではありません。幸いなことに、これまでのネットワークが活かされ、私たちには「生（なま）」の実情を知ることが与えられています。そして、その現場に生きる人々との連帯・協働の機会が与えられています。そして更に、そこで共有される情報を全国・全世界にお伝えし、そこからの議論を通して新しい知見を得る、そんなネットワークの広がりも、与えられているのです。

今、私たち東北ヘルプは、特に、「放射能計測所」を維持運営して情報を集積し、原子力災害の現場に生きる人々と会議を重ね、そこに専門家の知見を織り込みながら、「原子力災害の減災」を実現しようとしています。つまり、被ばく（専門用語では「低線量被ばく」）からの「防災」は難しくても、その悪影響を低減させることは、工夫次第でできる。その情報を集約整理し、わかりやすくまとめて、特に「お母さんたち」と共有する。そんな活動が組みあがりつつあります。

(3) 情報発信

私たちにとって最も大きな脅威は、「風化」です。私たちの目の前・身近なところに痛む人がいるのです。その人々が孤立することこそ、なんとしてでも・なんとかして、食い止めなければならない。そのように思わされています。

今、私たち東北ヘルプは、一所懸命に情報発信に努めています。可能性があるところには、必ず足を運び、被災地・被災後の日常の現状を報告する機会を獲得しています。東北ヘルプ事務局長が担った今年度の主な活動だけでも、以下ようになります。

4月27日 石巻広域・神戸ポート ワイズメンズクラブ ジョイントコンサート（石巻）：
神戸と石巻をつなぎ同時開催をする被災地支援コンサート開催に協力しました。

5月27-31日 日本聖公会 原発のない世界を求める国際協議会（仙台）：
世界の教会指導者が集まる会議で、講演者を務めました。

6月16-18日 日本福音連盟聖化セミナー（山形）：全国の教会指導者が集う会合で、講演者を務めました。

6月29日 日本宣教会（東京）：
研究発表の形式で原子力被災地の現状の報告をしました。

7月20日
ワイズメンズクラブ国際協会アジア太平洋大会（宮城・福島）：全国・全世界から集まった700名が被災地を巡回する企画に携わりました。

8月7日 諸宗教間対話集会「死とは何か」（広島）：広島「原爆の日」関連催事で被災地の現状を報告しました。

8月11日
仙台キリスト教連合平和祈禱集会（仙台）：
東北ヘルプの設立母体による催事で報告を書面にて致しました。

原発のない世界を求める国際協議会

▲仙台聖ヨハネ教会 祈りの園にて

**核の平和
の欺瞞に
対峙**

日本聖公会（福松誠善主教）は5月27～31日、「原発のない世界を求める国際協議会」を宮城県仙台市で開催した。各教区司教をはじめ全国から日本聖公会関係者、韓国、台湾、米国、フィリピン、英国の聖公会関係者、さらに日本キリスト教協議会（NCC）から約70人が集まり熱心な議論を交わした。会議に先立ち福島県の原発被災地視察をめぐるフィールドスタディも行われ、津波被災地の視察が行われた。基調講演はドイツの「脱核」政策策定・実行に直接携わるミラング・シュレーズさん（ミュンヘン工科大学教授）が担当し、日本基督教団、日本バプテスト連盟、保守バプテスト連盟などの牧師、信者も参加した。2日目の講演を担当した川上直哉氏（東北ヘルプ事務局長、日本基督教団行啓栄光教会牧師）に会議の報告を寄せてもらった。

**東北ヘルプ事務局長
川上直哉氏**

キリスト教の会議であることの特徴と強みは、祈りと礼拝を支えられているということにある。その開会礼拝はルカ福音書11章によって導かれた。すなわち「求めなさい、そうすれば、与えられる」とのことばを聞き、この会をはじめられた「救はく地アクション」の現場に立って、態度となく期待を裏切られ、何處も絶望へといざなう声を聞いてきた私に、この開会礼拝は力を与えた。2回待たれた聖餐式は、主において私たちが一つの家族であることを体感させた。毎週祈られる「祈禱」は、私たちの悔悟と神の救いの方動へ参加者を招き入れた。この協議会は、確かに、教会の協議会であった。（2頁につづく）

5月27～31日の日本聖公会国際協議会を報じる

『キリスト新聞』2019年6月21号

8月20-22日 エキュメニカルネットワーク全国協議会（京都）：
全国協議会の開会礼拝奉仕者として祈りを呼び起こす役を担いました。

9月4-5日 盛岡YMCAリーダーキャンプ（南相馬市）：
チャプレンとして原子力災害の現場をご案内する役を担います。

9月7日 シンポジウム（石巻）：
「本当の復興」とは何かを議論する会合の企画と司会を担当します。

9月14日 キリスト教史学会
発表「東北キリシタン研究の可能性と課題」（東京）：被災後の地域興し・交流人口の維持増加を図る取り組みの報告をいたします。

9月16日 講演「東日本大震災被災地からの反省と提言」（名古屋）：「次の大災害」への備えを進める名古屋の皆様にご体験を語ってきます。

9月17日 仙台キリスト教連合学習会（仙台）：「超教派の交わりが被災現場で持つ意味」を学ぶ催事を企画しています。

9月末 放射能計測事業の「モノグラフ」としてまとめる論文の締め切り：来春出版される書籍の一章を担当します。

震災復興の担い手としての精神障がい等の障がい当事者の可能性について語ろう！

障がい町興しシンポジウム

及び「べてるの家」の当事者研究セミナー開催のご案内

「べてるの家」は、超高齢化・過疎化の北海道産別荘において、「障がい町興し」に約150名の精神障がい当事者・スタッフが取り組んでいます。この「べてるの家」の理事で北海道医療大学教授の向谷地生良さん及びべてるの家のメンバーをお招きするとともに、「NPO法人東日本大震災こども未来基金 理事長」高成田 享さん（元朝日新聞記者・朝日テレビニュースキャスター・朝日新聞石巻支局長）、「NPO法人被災支援ネットワーク・東北ヘルプ」事務局長 川上直哉さんをお招きして下記のシンポジウム・セミナーを開催いたします。定員がございまして、事前に電話又はFAXによる申し込みのうえ、ご参加くださいますようお願い申し上げます。

向谷地生良さん 高成田 享さん 川上直哉さん

<p>第1日目【シンポジウム】</p> <p>日時：2019年9月7日(土)PM2:00～4:00</p> <p>テーマ：「震災復興の担い手としての障がい当事者の可能性について」</p> <p>シンポジスト：●向谷地生良さん 「北海道医療大学教授・北海道産別荘の理事長」 ●高成田 享さん 「NPO法人東日本大震災こども未来基金 理事長」 （元朝日新聞記者・朝日テレビニュースキャスター） ●川上直哉さん 「NPO法人被災支援ネットワーク・東北ヘルプ」事務局長 ●その他か（水産加工会社社長さん・障がい当事者等）</p> <p>対象：精神障がい等当事者・家族・支援者・一般（水産業役員、社員、どなたでも）</p> <p>会場：石巻市保健相談センター3階「講義室」（エレベーターあり）</p> <p>参加費：精神障がい等当事者無料、家族・支援者・一般1,000円</p> <p>定員：110名</p> <p>駐車場：石巻駅周辺の有料駐車場をご利用ください。</p>	<p>第2日目【当事者研究セミナー】</p> <p>日時：2019年9月8日(日)AM10:00～12:15</p> <p>講師：向谷地生良さん（北海道医療大学教授・北海道産別荘の理事長）</p> <p>ゲスト：べてるの家のメンバー・その他か</p> <p>対象：精神障がい等当事者・家族・支援者・一般（医療、福祉関係者・どなたでも）</p> <p>会場：石巻市保健相談センター3階「講義室」（エレベーターあり）</p> <p>参加費：精神障がい等当事者無料、家族・支援者・一般1,000円</p> <p>定員：80名</p> <p>駐車場：石巻駅周辺の有料駐車場をご利用ください。</p>
---	---

申込用FAX送信書は裏面にございませう

TEL 0225-24-9147
お問い合わせ 携帯 090-8610-1950

主催：一般社団法人シャロームいしのまき
祝芳健筆文庫型 福祉事業所 就労サポートセンター「べてるの家」理事長：大林 健太郎

電話 0225-24-9147 メール shalom5963@yahoo.co.jp (※FAX)
FAX 0225-24-9641 ホームページ shalom4090@yahoo.co.jp (※FAX) http://shalomshinomaki.bitter.jp

後援：宮城県東部保健福祉事務所・石巻市・東松島市・牡鹿郡女川町・石巻市社会福祉協議会・東松島市社会福祉協議会・女川町社会福祉協議会・共生型ケアをひろめる会・石巻聖心会障がい児（者）を守る会・特定非営利活動法人東宮園・NPO法人ワークーズ石巻地域福祉事業所

(了)

9月7日開催のシンポジウム（石巻）のチラシ

ワイズメンズクラブ国際協会第28回アジア太平洋大会に参加して

「3・11」は、風化していきます。そのことは、あるいは、止められないかもしれません。でも、そのことに心を痛めて下さる多くの方がいます。

風化に抗うのは、難しい。でも「風化させまい」という志を持つ方々とつながり、協力し仲間を増やすことは、可能だと思います。

YMCAは「イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕」を具体化する国際団体です。そしてYMCAの後援団体が「ワイズメンズクラブ」と言います。YMCAとワイズメンズクラブが力を合わせ、「アクション！：前へ進もう」をテーマに、2019年7月19日～21日、国内から600名・海外から100名の参加者を得て「アジア太平洋大会」を被災地で開催してくださいました。その企画をしてくださった方々の胸には「被災地を覚える・忘れない・忘れさせない」という思いがありました。

東北ヘルプはこの大会に参加・協力し、特に現地ツアーの企画とガイドに加わりました。以下、開会礼拝(英語)で事務局長が担当した「開会祈禱」の日本語訳と、「現地ツアー」のガイドを担当した阿部頌栄理事(日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師)と事務局長の報告を掲載します。

(2019年8月8日 事務局長 川上 記)

開会祈禱

いのちの神よ。キリストが私たちに、あなたのことを「私たちの父」と呼ぶように、励ましてくださいました。あなたの聖名を称えます。あなたから賜る正義と平和を、私たちは待ち望んでいます。この場はなんと素晴らしく喜ばしいことでしょうか。あなたの民が共に生き、調和しています。これこそあなたご自身の手によるあなたの素晴らしい御業。私はそれを見て心から喜んでいきます。

私たちの父よ。私たちはあなたの祝福を願っています。どうぞ、このアジア太平洋大会を祝してください。地震と津波と原子力災害という三重災害を負ったこの東北で、未来に向かう次の一歩・新しいアクションを見つけたいと思っています。

「前へ進もう！」というあなたの声を、どうぞ聞かせてください。この重要な大会を担い進めるスタッフを支えてください。参加者一人一人を、あらゆるトラブルからお守りください。

憐れみ深き私たちの主よ。私たちはあなたにお詫びしなければなりません。まずなにより、日本人としての私たちは、この美しい大地と豊かな海を、福島第一原子力発電所によって傷つけ、汚染し続けています。かくも豊饒な環太平洋地域を、

あなたは私たちにお分かちくださいました。それなのに今、私たちはそこに苦しみ声を聞くのです。そこに移民の問題があります。そこに基地の問題があります。そしてそこに、放射能の問題があるのです。

希望の神よ。私たちを赦してください。そして、苦しむ人々と連帯することができるように、私たちを励ましてください。2011年3月11日の津波で壊滅したあの時、この被災地に、美しい愛と慈善が輝きました。あの輝きの中に、あなたご自身の御業が現れたと、私たちは信じています。私たちは希(こいねが)います。どうぞ、あの時と同じあなたの御業を、今、お示してください。

この大会の初めから最後まで、あなたの祝福で満たしてください。主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン





被災地ツアー報告 1 被災地を憶え祈って頂くために（報告者：東北ヘルプ理事 阿部頌栄）

去る7月19日から21日に開催された国際ワイズメンズクラブアジア大会に、東北ヘルプ理事として、私も協力をさせて頂きました。東北ヘルプの活動の目標の一つは、できる限り多くの方に被災地を憶え祈って頂くことだからです。私は20日のエクスカージョン(体験型見学会)松島コースのガイドを務めさせて頂きました。

ツアーは三陸・松島を回り、東松島の野蒜・東名地区を巡るコースでした。三陸の南地域、松島の近辺は古墳時代・平安時代からの古い歴史を持つ地域です。多島海の美しい島々で織り成す海岸線は人々の心に憧れを抱かせ、旅へと導きました。わたしの同乗したバスは全員が台湾からの参加者の皆さまで、初めての三陸に心躍る様子でした。特に「この地が俳句で有名な芭蕉の最後の旅の地です」と紹介すると歓声が上がりました。台湾でも俳句は有名なようです。

三陸のリアス式海岸は地震と津波で作られたものです。地形と歴史の話から東日本大震災へと繋げてお話をいたしました。歴史としてみれば、この地は何度も災害を経験しています。ですが、それに直面しなければならなかった人々の苦しみは、いつであっても過酷です。

石巻の小学校で英語の教師をされていたテイラー・アンダーソンさん(津波で亡くなられました)を起点に広がった米国のネットワークを紹介するビデ

オを車中で視聴し、松島では「語り部クルーズ」に参加しました。そして東松島の野蒜・東名地区では旧JR野蒜駅と「復興伝承館」を巡り、そして「キボッチャ(被災した旧野蒜小学校を改修して使用されている研修施設)」の見学をいたしました。バスの中では、折を見て私も自分自身の経験などをお話しさせて頂きました。十分な説明ができたかはわかりません。それでも帰りの道の中で、幾人もの方が「台湾に戻っても祈ります」とお答えくださったのでした。大変嬉しく、ありがたいことでした。

遠くからのお客様をお迎えして被災地のことをお話しさせて頂くことはなかなか難しいことでした。しかしお越しくくださった方々が東北を楽しく堪能しながらも、真剣なご様子で被災地を知り、これからのことを共に考えてくださることは、大きな励ましと慰めを覚えることでした。

東北ヘルプの目標の一つは、多くの方に被災地を憶え祈って頂くことです。震災から8年半が過ぎようとする今、ニュースレターをお読みくださっている皆さまを始めとして、なお多くの祈りが重ねられ、繋がっていることはとても嬉しいことです。祈りに支えられる時、人は苦しい中でも不思議に生きる力を取り戻すことができます。被災地に祈りを繋ぐ。幾ばくか、今回の仕事で改めて関わらせて頂き、ありがたく思っています。

(了)

被災地ツアー報告2 福島、そして「小学校」(報告者：東北ヘルプ事務局長 川上直哉)



バスの車窓から除染物質の仮置き場を眺める

福島ツアーは、相馬市のNPO法人「野馬土」の現地ガイドを中核にして催行されました。参加者は100名ほどとなり、大型バス3台のツアーとなりました。毎年3000人程度の視察旅行者を受け入れてきた「野馬土」の方も「これほどの規模は初めて」とおっしゃっておられました。

仙台を朝8時半に出発し、1時間ほどかけて福島県相馬市内に入る。そこで相馬市民である「野馬土」の方が搭乗され、ツアーが始まり、原発周辺を巡って相馬市付近まで戻り、「野馬土」のガイドが降車され、仙台市へ戻る——東北ヘルプは、この「仙台市から相馬市への往復」の2時間半程度の時間に、「福島県キリスト教連絡会」や「キッズケアパークふくしま」そして「相馬広域こころのケアセンター なごみ」の活動を今も担っておられる方々に同乗頂き、「福島で今、生きて感じること」をお話し頂く手配をいたしました。5名の方々がご協力下さり、濃密な学びの時を組み立てていただきました。



原発事故現場から10km北の請戸小学校を、生徒と教諭が津波から避難した高台から眺める

「野馬土」の方々のガイドは、東北ヘルプ関係の私たちにとっても、新鮮なものとなりました。原発事故現場から40km以上北に広がるのが相馬市です。30キロ圏内の強制避難あるいは避難準備の区域をそばに見ながら、日本政府から「緊急時避難準備“不要”区域」とされた。その不安と苛立ちを深く心に刻まれたのが、相馬市の方々でした。その立場から見える「原発周辺」は、とても親しく身近でありながら、しかしある種の距離を保って冷静に客観視される。そのガイドは、原子力災害の被災地の複層性をしっかりと語り、そしてそれゆえに、その深刻さをよく伝えるものとなっていました。



石巻市の大川小学校
約90名の教諭・生徒の内84名が亡くなりました

今回のツアーは全部で4コース用意されました。阿部先生が同乗された「東松島・松島コース」が一番人気で、バスは7台(!)用意されました。他の二つは「名取・岩沼コース」と「南三陸・石巻コース」でした。どのコースも「小学校」が焦点となりました。一方に、戸倉小学校(宮城県南三陸町)・請戸小学校(福島県浪江町)・荒浜小学校(宮城県仙台市)は、生徒が教師を助け、あるいは先生方が適切な判断をし、多くの命が助かりました。他方で、大川小学校(宮城県石巻市)の悲劇もありました。その現場に立つ。そうすると、何かが深く伝わってくる気がします。原子力被災地も、そうです。現場の力は、風化に抗う足掛かりとなる。そのことを、改めて深く学ぶことができました。(了)

阪神淡路大震災が発災した1995年は「ボランティア元年」と呼ばれました。巨大災害を契機に、長く「寄付文化」がなじまない、「ボランティア活動」は定着しない、といわれてきた日本社会が、変わったと言われます。

東日本大震災が起こった2011年は「ネットワーク元年」と、後に呼ばれるかもしれません。巨大災害を契機に、苦しみの現場で教団・教派等の伝統を超えて連絡を取り合い、協力し合うことが「当たり前」になったように思います。

今、各地でこうしたネットワークをつなげ広げようという動きが始まり、展開しています。私たち東北ヘルプも、その一助となれればと願っています。

2019年6月、JEA（日本福音同盟）を中心に、将来の災害に備える会議が開催されました。全国から多くの方が集まりました。そこには、東日本大震災を契機につながったネットワークが展開していました。

その会議に、東北の被災地の情報を発信すべく、岸田誠一郎先生が参加していただき、その報告を執筆くださいました。ご高覧賜れば幸いです。

（2019年8月10日 川上記）

国内災害対策フォーラムに参加して

福島県キリスト教連絡会・放射能対策室 代表
食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会 副委員長
ミッション東北 福島聖書教会 牧師 岸田誠一郎



1. 参加にあたって

6月25日、東京 御茶ノ水にあるOCC（お茶の水クリスチャン・センター）にて『国内災害対策フォーラム』が開催されました。東北ヘルプからも参加が検討され、食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会のつながりで、私に参加の機会が与えられました。

2. 発表を聞いて

フォーラムでは、現地で災害支援をしてきている諸団体から、いくつかの発表がありました。よい成果（成功体験）だけではなく、現場での難しさや葛藤（失敗体験）を包み隠さず語ってくださり、深く考えさせられる内容でした。今後によりよい支援活動をするための次の段階の課題が、一支援団体の中だけで保持されるのではなく、多くの支援団体が一同に会した公の場で、信頼

東北ヘルプ事務局から「とにかく参加してみてください」との依頼を受け、詳細はあまりわからないまま出席しましたが、主催者側の当初の予想を上回る数（“60部あれば”ということを持ち込んだ私の印刷物＝私信『福島で思うこと7』と『放射能対策室だより3』が足りなくなる程の人数でした）の参加者が全国から集り、想像を超えた濃い内容で驚きました。

関係の中で共有されたことに、とても大きな意味を感じました。支援活動の文化・風土を高めるためには、現場レベルのこういった課題の共有が不可欠だと思います。そういった点で、このフォーラムが、将来につなげる大切な場となったことでしょう。発表をしてくださった方々や、このような集りを企画・準備してくださった方々に、心から感謝をいたします。

3. 自分に与えられた機会

午後は、全国7ヶ所の地域の活動ブースが設けられ、それぞれに分かれて活動紹介と意見交換の場が設けられました。私は、高橋拓男師（福島県キリスト教連絡会／会津聖書教会牧師）とともに、『福島』のグループでお話させていただきました。

福島のことを考えるにあたっては、放射能の問題を避けて通ることはできませんが、福島県以外の人々には、現状がなかなか伝わっていません。短い時間でしたが、関心をもってくださる方々に持参した印刷物などを用いながら現状と活動の一端をお伝えする機会を与えてくださったことは、日頃、現地からの情報発信を強く意識している者にとっては、大変ありがたいときでした。（了）



地域活動ブースの様子

手前グループの右から二人目が岸田牧師

皆様のご支援に支えられ、東北ヘルプは、現場に展開する支援活動をサポートしてきました。気仙沼の本吉地区では、震災の翌年から既に現地で支援活動をしていた方々と協力して、主に「人を派遣する働き」の支援をしてきました。当初「自分たちでの施設立ち上げなど不可能だ」と考えていたものでした。しかしその後、新規NPO法人の立ち上げ・プレハブの施設での仮運営・1600坪の土地の購入・新施設の建設そして施設増設と、目まぐるしい展開をしています。そして昨年末、この活動をモデルにした別法人が、気仙沼市内に立ち上がりました。

2019年6月28日に、事務局長である川上牧師と理事である中澤牧師と秋山が現場の2つの施設に行ってきました。その報告を、川上牧師がいたします。(2019年8月8日 秋山善久 記)

気仙沼 障がい児支援の展開

東北ヘルプ事務局長 川上直哉

先日、関東に本社をもつ中堅企業の社長さんが、真剣な顔で、私にこう言いました。「これから事業所や支社を出す場所として、東北を選ぶ会社は、まずいない。出すなら、関西だ。なぜなら、人が少なすぎて、ビジネスが展開できると思えないから・・・」と。

津波の被災地は、もともと、「少子・高齢・過疎」の深刻な現場でした。津波が破壊したものを復旧させても、それで展望が開けるわけではない。加えて、原発事故の影響で、インバウンドの好景気など、全くどこにも感じられない。それが東北の被災地です。

これまでの在り方へと復旧しても、その先はない。それならば、新しい何かを切り拓けばどうだろう。たとえば「障がい者」を中心に位置づけて、そこから産業や生活が回りだす。そんな新しい「何か」を組み立ててはどうだろう——そんなことを考え、被災地の人と話し合い、全国・全世界の力をお借りして支援活動を展開したのが、東北ヘルプの秋山善久理事（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会 牧師）でした。そして、その志に共鳴し、具体的に広がる目の前の課題に向き合い立ち上がってくださったのが、佐藤工（たくみ）さんでした。

佐藤さんは震災後にNPO法人を立ち上げ、避難所などでつらい目に遭った「障がい児」を具体的に助けるために福祉事業所を開設。そして今、その事業所の増築工事に忙しくされている。その佐藤さんを、お訪ねしてきました。もともと、八百屋さんだった、佐藤さんです。福祉は全く「畑違い」。ですから逆に、福祉の常識の“隙間”が、以前から気になっていました。そこに手が届くような福祉サービスを提供したい。その思いは、震災の中で余計に苦しむ「障がい児」とその母親を目の当たりにして、深く強まったと言います。そうして始めた佐藤さんの新しい福祉事業所は、新しい雇用を生み出しました。



リアス式の高台にある気仙沼市本吉町の福祉事業所「ほっぷ」

気仙沼市の「復興状況」を見てみれば、漁業以外を除くと、震災前よりも心配な状況になっている。そしてそもそも震災前から、「障がい児」を育てている母親がフルタイムの職を見つけることは「まず不可能」であった。それが、気仙沼市だそうです。しかし、佐藤さんが始めた福祉事業所では、今現在、9人のフルタイム職員の内2人が「障がい児の母」であるとのこと。そして事業の収支も現在「黒字」となり、いよいよこれから、なお足りていない福祉サービスを提供すべく、事業所を増築し、事業の拡大を進めている。確かに、新しい「何か」が、佐藤さんの周りで始まっています。

「その歩みは、決して平たんではなかった」と、これまでを振り返り、佐藤さんは言いました。行政や既存の福祉事業所が「やりたくてもできない」分野があり、それで取り残されて困っている人がいる。そこに手を届かせる。それはまったく簡単なことではなく、そしてそれは、時に軋轢を生むことにもなったそうです。でも、七転八倒しながら「4年間」踏みとどまった。そして昨年あたりから、急に見通しが良くなってきた。遠くに住む方であっても、介助に手間のかかる「障がい」をお持ちの方であっても、一人一人を大切にすること。その努力が、少しずつ浸透し、良い評判を生み出し、利用者が増えていったのだそうです。

「社会の端にではなく、社会の中心に、障害者がいる」という世の中にしたい。佐藤さんは私たちに熱っぽく語っていただきました。

そんな佐藤さんの思いは、具体的に広がりを持ち始めました。 佐藤工さん(増築工事中の現場で)



佐藤さんの事業所は気仙沼市の南部の沿岸地帯・本吉町です。そこから北へ15キロほど進む内陸部に、水梨という地域があります。そこに、今年、新しい福祉事業所が生まれました。その立ち上げを担った事務長さんは、佐藤さんの所へ来て数か月「修行」をし、そのノウハウを活用したそうです。私たちはそちらにもお訪ねをしました。新しい福祉事業所は「いっぼ」と名付けられ、障がいと共に重い病気をお持ち

のお子さん方を預かる事業を始めたそうです。「子どもたちを守るだけでなく、輝かせたい」という思いを、その事業所の理事長である秋山順子さんが、やはり熱を込めて、私たちに語っていただきました。

全国の皆様が寄せてくださった被災地への思いが、地元の方々の手によって一番小さなところ・見逃されているところへと注ぎこまれ、まったく新しい展開を見せて行く。被災後の日常の中で、小さくても確かな明るさを、私たちは確かに拝見したのだと思いました。

(了)



事業所「ほっぷ」のスタッフの皆さんと一緒に
(この日、石巻の教会から、車いすが寄贈されました。)

支援の終わり／支援の^{みの}稔り

インタビュー：ハートニット事務局 松ノ木さん

東北ヘルプがずっと向き合ってきた課題は、「支援はどう終わるのか」ということでした。支援者の日常もあります。被災者の生活再建も進みます。そして、実にしばしば、「被災者」の生活再建が進む陰で、「支援者」が困窮していく、という矛盾も起こりました。「支援がうまくいく」ということが、「支援の終わり」をもたらす。そもそも支援とはそういうものだ——そう覚悟をして、もう8年半の年月を過ぎようとしています。

震災後ずっと岩手・宮城の沿岸部を支援して下さってきた「ハートニット・プロジェクト」が、今年、ボランティア活動を終える、と決定されました。しかし、その働きは「次の段階」へ進むのだとおっしゃいます。

「ハートニット・プロジェクト」とは・・・

- ①津波被災地の被災者の心の空白を埋めるために
- ②全国から「編み物」の道具や糸をご寄付いただき、
- ③ニットの指導者と共にそれを被災者に届け、
- ④編み方の指導を行い、技術の向上を見て、
- ⑤一定水準以上の製品については「ハートニット」のブランドを付け、
- ⑥バザーなどで販売し、その売り上げの全額を制作者(被災者)に届ける。

・・・という支援活動です。すべてはボランティアによって担われ、被災地の復旧状況に伴走しつつ、徐々に上記の形へと整えられてきました。

東北ヘルプは、とりわけ宮城県南三陸町のハートニットの働きをご一緒させていただいて参りました。2019年8月13日、今も南三陸に通い続けておられる中澤牧師(東北ヘルプ理事)にご案内頂き、私たちは南三陸町を訪れ、ハートニットに参加している被災者の方々のお話を伺いました。そしてその後、テレビ電話で、盛岡にある「ハートニット事務局」の松ノ木さんと、お話をしました。その中で見えてきたのは、「支援活動の終わり」の先にある「支援活動の^{みの}稔り」でした。

以下、できるだけ簡潔に、松ノ木さんと中澤牧師との対話をまとめます。

「もうすぐ10年」となる被災地の“これから”を考えるためにも、ご高覧頂ければ幸いです。

(2019年8月15日 事務局長 川上直哉 記)



テレビ電話で松ノ木さんとお話する中澤牧師(写真右)

ボランティア活動としての「ハートニット・プロジェクト」の終結と展開

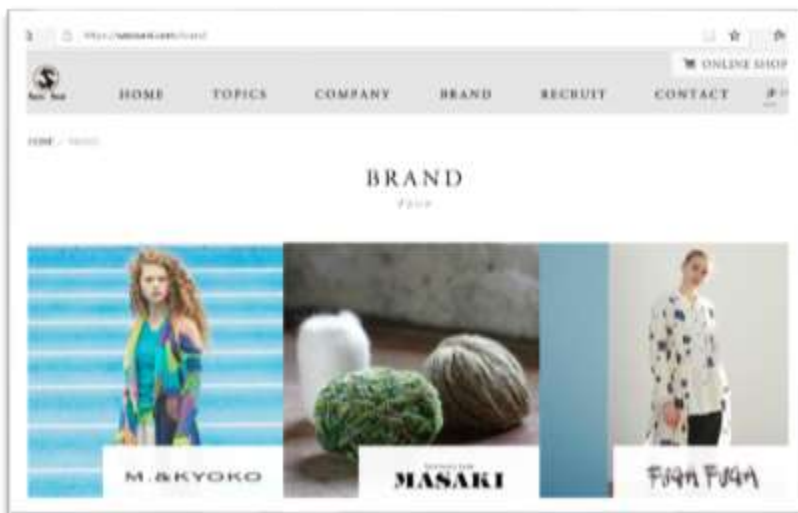
松ノ木：震災後、多くの方々のご支援によって、私たちのプロジェクトは豊かに展開してきました。本当に多くの方々、被災地での心の空白を埋めることができました。そして決して少なくない金額を、被災者各位にお届けすることができました。生活再建のために、一定の役割を果たすことができました。これは本当に、私たちの力を越えたことでした。賜ったご支援の一つ一つを思うと、最後の最後まで責任をもって支援活動を完結させなければならないと思っていました。「もう十分やった」という自己満足ではなく、具体的な「次の段階」を見て、その先へも伴走する。そうやって初めて、ボランティア活動は終わるのだと思っていました。

本当に幸いなことに、昨年あたりから、いくつもの大きなニット関連企業様が、「ハートニット」の編み手のお一人お一人のお仕事を評価して下さり、正式に契約して下さいました。私たちは、今こそ「ボランティア活動としてのハートニット」が終わる時だと思い、今年春、終結の宣言をして感謝の集いを開催したことでした。



2019年5月13日付「河北新報」記事

中澤：その集いに、私たちもお招きを頂き、とても良い時をご一緒できました。感謝なことでした。「ボランティア」のハートニットが終わる。「ボランティア」での関わりが終わっても、なお一層、お一人お一人とのつながりを豊かに展開される。本当に素晴らしいことと、敬意を覚えています。



佐藤繊維株式会社様のホームページ

松ノ木：たとえば宮城県の南三陸町では、3名の方が、最後までハートニットに加わって下さいました。その技術は確かなものとなり、山形県の世界的アパレル企業「佐藤繊維株式会社」様が、協働して下さいることになりました。

「佐藤繊維」様は、100年以上続く老舗の企業です。4代目となる今の社長の佐藤さんは、繊維工場からアパレル企業へと転換を図った、その最初の頃、全国・全世界を行商して回った苦勞を思い出し、ハートニットの新しい展開に力を寄せたいと言ってくださいました。

中澤：被災地の苦勞が、被災地以外にある苦勞と響きあう。そうして被災地の支援段階が終わり、次の段階へと展開する。そういうモデルが、ここにありますね。

新ブランド「テトリコット」と「お金稼ぎではない仕事」

松ノ木：佐藤繊維様が提案してくださったのは、新ブランド「テトリコット」でした。「手編み」の“テ”、「三陸で編み手・ハートニット事務局・アパレル企業の三者（トリオ）が会う」で“トリ”、そして「フランス語のニット」を意味する“トリコット”を掛け合わせた、新しい言葉が「テトリコット」です。アパレル企業として、新しいブランドを立てる、そこに尊い心意気を感じています。



高台にあり、津波の直撃を受けなかった南三陸町旭ヶ丘地域

中澤：南三陸町で、編み手の方々とお会いしてお話を伺ってきました。南三陸でも、最初は50名近くまで、参加者がいました。でも、最初にこのプロジェクトに参加された地域（旭ヶ丘地域）の方々が残った。その地域は、高台にあり、津波によって家が破壊されなかった場所でした。しかしその周囲は壊滅状態となり、陸の孤島となって大変な苦勞をされた。そしてその周囲の「家を流された被災者」との間に、とても微妙で繊細な感情のずれが生まれてしまったようです。その旭ヶ丘地区への支援として、私たちはハートニットをご紹介したのです。その時のことを、よく覚えています。そしてその最初の場所が、今、次の段階である「テトリコット」へ進むことを思うと、感無量な気持ちになります。

松ノ木：南三陸の方々は、「お金稼ぎ」ではなく、「やりがい」あるいは「編み物への愛好心」が動機になっておられます。自分たちの誇りとなる「制作」という作業が、今回、全国・全世界に流通するブランドとなっていく、そのことに、いよいよ生きがいと誇りを覚えてくださって、いよいよ責任感をもち、そしてもうとっくに、「アマチュア」の域を超えておられます。そのことを、本当にうれしく思っています。



南三陸町の「編み手」のみなさま

中澤：価値が、お金を生み出しますね。お金が価値を生み出すだけではない。本当の価値は、お金から生まれるのではなく、お金を生み出すような気がします。編み手の方々が生き生きと喜びをもって仕事をし、それがブランドとなって流通する。支援の結果として、「お金」ではなく「仕事」が立ち上がった。すばらしい展開だと思うのです。

支援の稔^{みの}りと、支援の連携

中澤：でも、その軸になっているのは、やっぱり、ハートニット事務局を担われる松ノ木さんとの「関係」だ、と思うのです。

「ボランティア」や「支援」は終わる。でも、そこに「あなた」と「わたし」という関係が生まれる。その中で、お互いが「自分らしく」あり続ける。そうして、新しい展開が生まれる。その中には「あな

た”がいてこそこの“私”がいる。気が付くと、そうなっている。その時、お互いが「かけがえのない存在」となっている。どんどん状況が変化しても、いよいよその関係は豊かに・強固になる。そういう素敵な信頼関係が、ここに生まれたのだと思いました。きっと、それこそが、「支援の終わり」に期待される「支援の^{みの}稔り」だと思うのです。

松ノ木: どんなに頑張っても、こうした道に皆さんをリードできるものではないと思います。私たちは、望む以上のところに到達した。「レールを敷いていただいた」という思いがします。あるいは神様の働きがここにあったのだらうと思われています。いろんなアタックもしました。道が閉ざされることもあり、こちらが望む以上の道が開いたりしました。

宮城にハートニットを展開しよう、というのは、岩手に住む私たちにとっては、一つの大きな挑戦でした。うまくいかないかもしれない。でも、必要とされているならやってみよう。そう勇気を出して始めたことでした。それがこのように、本当に素晴らしい形で展開している。本当に不思議なことと思います。

中澤: 私も、そういう体験をずっとしてきました。感謝なことに、被災地で、私はたくさんの素晴らしい信頼関係を与えられました。私は、その関係の中で、神様の祝福という「福音」を携えて、お一人お一人と伴走し続けようと思って、今も働きを続けています。

今年も私たちは、仙台市内で「祭り支援」、南三陸町で「花火支援」などを行い、仮設住宅を出られた方々の新しい自治会活動を力づける働きを継続しています。そこで感じていることは、自分の進めている働きとは違う、別の支援の働き（例えば「ハートニット」）が、同じ信頼関係の構築を目指して展開し、いつか私たちの働きと現場で交差する、その時、本当に大きな相乗効果が生まれるという、その大きな可能性です。今回、南三陸でそのことを実感しました。

東北ヘルプの存在が、こうした「支援の働きの出会い」のプラットフォームとなっていると思います。これからも、松ノ木さんたちと力を合わせて、被災者お一人お一人と伴走していきたい、と思います。（了）



2019年7月27日に仙台市内で行った「祭り支援」の様子

原子力災害の減災に向けて

食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会委員長
仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク・東北ヘルプ事務局長
川上直哉

1. 74年後の被ばく地

2019年8月6日、私は広島で、お二人の方から被ばく証言を伺いました。

お一人目は、男性でした。その方は「原爆の被害は爆風・熱線・放射能」の三つであることを明言した上で、「爆風・熱線」については極めて雄弁に語り、しかし、「放射能」については一言もお語りになりませんでした。

お二人目は、女性でした。その方もまた、「爆風・熱線」について堂々と淀みなく語りました。そして、ご自身が妊娠した時、そのお子様が生まれてすぐ「脳の病」で亡くなったことを、語られました。その時、声はつまり、目頭は熱くなっている様子でした。しかしその後「でも、それが放射能のせいかどうかはわからないのです」と、すぐに言い添

えておられました。その様子に、私は「74年後の被ばく地」の現実を見た思いがしました。

「これは放射能のせいではないか」と直感的に思っても、それを口にすることは難しい——どうしてでしょう？ 自分の子どものこと、自分の健康のこと、自分自身の責任範囲のことです。自分の思う通りのことを、なぜ、語れないのか——しかしそれは、2011年からずっと、私たちが現実に見聞きし、あるいは体験してきた不条理です。私は、そこにこそ、原子力災害の核心があると思っています。人間の尊厳が、そこに脅かされている。そう感じています。そして、その「尊厳への脅威」は、74年後の被ばく地にも^の押しかかっている。その現実には、はたとさせられました。

2. 「被災支援ネットワーク・東北ヘルプ」と計測所と FCC

声高に語られることのない脅威。しかしその現場に立つと、その脅威の存在には気づかされるものです。そこにネットワークの可能性が見て取れる気がします。

(1) 2011年の混乱の中で、東北ヘルプのネットワークに福島県内からの声が響きました。「脅威を見えるようにしたい。計測所を立ち上げてほしい。」その声に、世界の教会ネットワークが応じてくださいました。東北ヘルプ事務局が連絡調整の任に当たり、「食品放射能計測所」が設立され、仙台・郡山・いわきの三つの都市で今も稼働しています。東日本に限らず、日本全国から「計測所を利用したい」との声を頂き、今、記録を見ますと「4,691件」の計測が2019年8月までに行われました。その中で、無色無味無臭の放射性物質が、山菜や土壌から、驚くべき数字で確認され続けています。

(2) 福島県のクリスチャンネットワーク（福島県キリスト者連絡会＝FCC）と計測所が連携し、「ホットスポットファインダー」という機械による計測作業も進んでいます。今、日本は「原子力

緊急事態宣言」下にあります。それはつまり、国際的に語られる「緊急時被ばく状況」にあるということです。その状況の中では、通常の「20倍」の被ばくまで、放射線防護の基準が緩和されます。そしてその状態で、もう8年半が過ぎた。「緊急時」が「常態化」している。それで、放射線について自覚することすら、今は難しくなっています。普段使う場所が、今どうなっているのか。震災前の基準で「見える」ようにするのが「ホットスポットファインダー」でした。その機械を用いての調査は今も継続し、そのデータは200回に及んでいます。

(3) 「震災前」＝「日本以外の世界中の基準」で今の緊急事態を把握した上で、どうしたらよいのか。避難を推奨する声があります。それは正しいと思いますが、避難できない状況の中に置かれている人が、大勢います。私たちは今、「原子力災害の減災」を具体的に考え進めています。これだけ広範に汚染されているのですから、「被ばく」を防ぐことは難しいかもしれません（ですから“非常事態宣言下”なのでしょう）。でも、その影響を低減させることはできる。その努力は、きっと、人々の尊厳の保持にもつながる。そう思って、東北ヘルプはFCCと計測所をつなぎ、学習会に参加してその成果を「原子力災害の減災」に展開しようとしています。



2019年5月1日、太平洋岸と福島市をつなぐ「ごく一般的な国道・県道」を、ホットスポットファインダーにて自動車内で実測。
 自動車内の為「3割程度」実際より低く計測される、にもかかわらず、矢印の区間で、
「0.3 μSv/h 以上=震災前であれば退避すべき数値」の放射線量が計測されたことが表示されている。

3. 原子力災害の減災

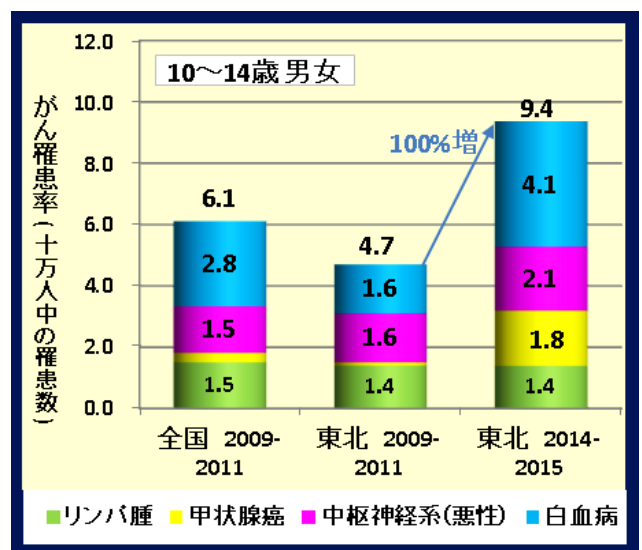
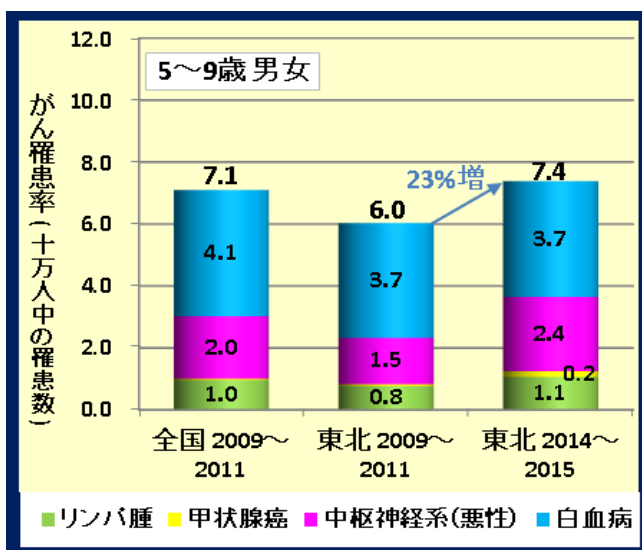
2019年8月9日、FCCの学習会で、一つの報告がなされました。それは「国立がんセンター」の資料の分析をしたもので、

- 「2011年に放射能の雲が通った地域」の
- 「2009～2011年」と
- 「2014～2015年」を比べると、
- 「10～14才」の男女で、
- 「10万人中のがん罹患率」の数値が、
- 「100パーセントの増加」を示す。

ということ等が報告されたのでした（下にその報告のためのスライドの一部分を抜き刷り致します）。

今年（2019年）春、福島県内のある学校の教諭から、「今、各学年に一人は、“きょうだいが白血病か甲状腺がんになった”という生徒がいるようになった」と、直接うかがったことを思い出します。もちろん「こんなことは、震災以前には、なかった」とのことです。

食生活、ストレス、たばこ、そして運動。そうした日々の努力で、こうした原子力災害の被害を減らせるかもしれない。私たちは今、その具体的な情報を整理し、今を生きる人々にお分かちしようと準備をしています。どうぞ、引き続きのご理解とご支援を、よろしくお願い致します。（了）



がん罹患率は、モニタリング期間の年間平均。リファレンスに事故前(2009～2011)の全国平均掲載

収 支 計 算 書

NPO法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

自 2019年 4 月 1 日
至 2019年 8 月 9 日

(単位：円)

会費収入	(正会員・協賛会員 合計1件)	5,000
献金収入	(教会・団体・個人 累計125件)	2,288,366
その他収入	(預金利息等)	
収入計		2,293,366
給料手当	(職員給料)	900,000
法定福利費	(社会保険・労働保険)	80,305
新聞図書費	(書籍代)	63,136
通信運搬費	(電話・郵便・運賃)	214,456
支払手数料	(銀行手数料)	21,646
外注費	(税理士・社労士)	172,800
事務費	(文具・消耗品等)	182,702
広告宣伝費	(ニュースレター等)	12,960
旅費交通費	(高速代・JR券代等)	533,083
燃料費	(ガソリン代)	94,912
会議費	(会食代・会場代等)	69,727
支援費	(他団体への支援)	547,160
支出計		2,892,887
当期損益金額		-599,521
前期繰越損益		1,535,307
次期繰越損益		935,786

活動計算書

2018年4月1日から2019年3月31日まで

特定非営利活動法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

(単位:円)

科目・摘要	金額		
I 経常収益			
1.会費収入			
会費収入	55,000	55,000	
2.受取寄附金			
受取寄附金収入	9,340,305	9,340,305	
3.雑収入			
預金利息	4	4	
経常収入合計			9,395,309
I 経常費用			
1.事業費			
(1)人件費			
職員給与	2,543,200		
法定福利費	184,558	2,727,758	
(2)その他経費			
福利厚生費	3,750		
新聞図書費	92,768		
通信費	526,179		
支払手数料	77,243		
外注費	560,736		
事務費	144,524		
広告宣伝費	735,877		
旅費交通費	1,166,204		
燃料費	264,869		
会議費	192,689		
支援費	2,252,390	6,017,229	8,744,987
2.管理費			
(1)人件費			
職員給与	130,800		
法定福利費	46,139	176,939	
(2)その他経費			
外注費	140,184		
事務費	36,131	176,315	353,254
経常費用計			9,098,241
当期正味財産増減額			297,068
前期繰越正味財産額			1,238,239
次期繰越正味財産額			1,535,307

献金感謝



(2018年11月15日～2019年7月29日)

お支えいただきました。本当に、ありがとうございました。(東北ヘルプ事務局)

献金者・協賛会員ご芳名(敬称略・順不同)

(学)愛育学園 鹿島幼稚園 (社)イエス团みどり野保育園 園長中田一夫 (社)日本コイノニア福祉会理事長 安田信人 (社)日本コイノニア福祉会 安田信人 (宗)国際シャローム・キリスト教会 青柳芳明 青山学院女子短期大学同窓会 赤崎克俊 阿久津マキ子 芦田政子 足立正範・実紀子 阿部典穂 甘楽教会 粟田昌子 安藤真理 遺愛女子中学・高等学校 飯沼一浩 池田キリスト教会 池田教会 石川勇吉 石川裕美 市川三本松教会 井出存祐 稲毛海岸教会 伊奈シャロームチャペル・キリスト教会 猪刈英人 猪瀬恭子 岩間節子 上坂寛子 上田徹・玲子 上野芝キリスト教会 千葉一夫 宇都宮松原教会 浦川肇・恵子 大井美歩 大阪栄光キリスト教会 大野典子 大林健太郎 大曲ルーテル同胞教会 大宮まぶね保育園 岡崎茨坪伝道所 岡本連三 岡山教会 小倉徳力教会 尾関幸子 男山教会 小幡正カ)ワールトラベル 改革派熊本伝道所 笠松絹子 柏原繁直 加藤啓子 カトリック徳田教会 大倉一美 金沢キリスト教会 株式会社あいあーる 金谷幸満 上山尚美 神楽町教会 河内常男 川上新一 川上政孝 川島敬子 河内キリスト集会(代、福本) 紀伊岩出伝道所 岸和田聖書教会 北柏めぐみ教会 木村葉子 京都上賀茂教会 京都都区京都南部地区 京都丸太町教会災害支援会計キリスト新聞社 金南植 釧路キリスト福音館 工藤ますみ 国兼光子 熊谷郁子 倉石昇 クリスマン・リンク名護チャペル 健軍教会 公益財団法人大阪YWCA 御器所教会 河野昌子 神戸改革派神学校学生会 代表者 小橋口貴人 神戸聖愛教会 小河義伸 国際基督教大学教会 児島教会 小平学園教会 小高美幸 小林和代 近藤直枝 埼玉新生教会 在日大韓基督教会全国教会女性連合会 在日大韓基督教会京都教会女性会 代表者 金仁姫 小坂井勉 崔正剛 堺教会 坂上好登 坂戸キリスト教会 桜井志穂子 札幌教会 札幌教会婦人会 札幌桑園教会 佐藤英子 佐藤江美(紀美子) 佐藤久芳 佐渡教会 佐原教会 東北教区放射能問題支援対策室 塩田明子 塩田隆良 塩田端代 塩田瑞代 シオン幼稚園 四條町教会 静岡教会 柴田公文 島田祥子 清水恵子 徐 鐘煥 下谷教会 市民クリスマス in 千葉 事務局 青木一芳 下館教会 宿河原教会 尚綱学院高等学校 湘南教会 菅沼理也子 巢鴨聖泉キリスト教会 巢鴨ときわ教会 杉並教会 鈴蘭台教会 須磨教会こどもの教会 聖愛幼稚園 聖書キリスト教会のぞみ教会 瀬戸昭 千光寺 大下大圓 仙台北三番丁教会 仙台北百合女子大学学生会 高橋通規 田北恵美子 竹本栄子 千葉あつ子 千葉教会 中部ディアコニア支援委員会 津久井進 鶴川教会 田園江田教会 天使幼稚園 天白教会 牧師 渡辺徹朗 天満教会 東京告白教会 教会学校 東京都民教会 道本純行 東洋英和福島の子どもの支援プロジェクト「虹の橋募金」藤村真弓 徳島教会 都倉久子 所沢聖書教会 中尾慎宏 長崎インターナショナル教会 柚之原寛史 中島隆宏 中屋重正 中山信一様・朝子 名古屋キリスト教協議会 名古屋中央教会 南光台キリスト教会 新里・鈴木法律事務所 太田伸二 新津ティ子 錦ヶ丘教会 錦林教会 西神戸教会 西千葉教会 西那須野幼稚園 西宮一麦教会 似田兼司 二宮創・恵美子 日本自由メソヂスト葛城キリスト教会 日本聖公会東北教区仙台基督教会 日本聖書神学校同窓会 日本同盟基督教団世田谷中央教会 芳賀慶治 橋本富子 長谷川正一 バツハコレギウムジャパン 濱地正枝 浜松中沢教会 はりま平安教会 原宿教会 こどもの礼拝 東所沢教会 東広島伝道所 女性会 久遠基督教会 日野神明キリスト教会 ひばりが丘教会 姫路野里教会 姫路和光教会 平井純子 平田清子 広島福音教会 福岡城南教会 福岡南キリスト教会 福田敦子 福本知恵子 福山天使教会 藤田直子 富士吉田キリストの教会 藤原俊樹 フダバ ヨシノブ 古川明 辺見トモ子 幕田君江 松木富夫 松本芳哉 三井肇 南山教会 美浜教会 子どもたちの教会 宮古聖ヤコブ教会 宮坂信章 宮崎昌久・せい子 麦倉道子 武蔵豊岡教会 村瀬義史 桃谷ちよ 盛岡スコール高等学校生徒委員会 門司大里教会 八重山中央教会 八潮キリスト教会 安田信人 八ヶ岳中央高原キリスト教会 山口由紀子 山中伸郎 山梨教会 友愛幼稚園 横須賀教会 横浜上原教会 横浜英和学院(宗教主任 鬼形恵子) 横浜英和学院学院長 伊藤 様 横浜海岸教会 横浜キリスト教会 横浜シオンキリスト教会 吉田正子 吉田朋子 吉田伸 四街道教会 ヨロコビケンキュウカイ 若月学 渡辺亮 渡辺滋子 渡邊信 渡部真澄 渡辺亮 和戸教会 阿部紀美子 愛のいづみキリスト教会 安藤元昭 安藤真理 伊藤まり子 横浜港南台教会 岡田真水 荻原邦子 鴨東教会 岸田清実 喜界教会 亀戸教会 久宝教会 宮井武憲 宮坂信章 金井美智子 金町教会 軽井沢追分教会 原科浩 原宿教会 子どもたちの礼拝 戸村千恵子 国際クリスチャンセンター 東芳子 佐久間弘子 佐用チャペル 細井孝江 桜井志穂子 三井肇 三橋稚津子 山崎耕司 山田直司 市川三本松教会 いづみ会 市民クリスマス実行委員会 浜田進 氏家教会 寺内利行・紀子 蒔田教会 酒井由布子 首里教会 宗教法人 IGL 広島福音教会 小倉徳力教会 松井田教会 松浦賢治 松田芳昭 松本教会 沼津岳南教会 上坂寛子 新所沢伝道所 森田竹千代 真宗大谷派聞光寺 佐藤智眼 杉林則子 世の光キリスト教会 星野房子 清水恵子(西村) 清瀬グレースチャペル 西川京子 西那須野教会 青戸教会子ども礼拝 青柳芳明 石垣正子 石巻栄光教会 仙台北教会 仙田典子 川上純平 川上政孝 川内常男 浅海幸弘 倉敷教会 早坂光弘 大曲ルーテル同胞教会 大日方由美 池田五月山教会 中川みち子 中村撰 長谷川正一 鶴見教会 田島慶子 渡辺滋子 渡辺真悟 島本暉子 東中野教会 藤田直子 同志社教会 内田公子 南浦和教会 尼崎教会 日向町教会 日高詩織 八尾福音教会 板橋大山教会 尾関幸子 富士吉田キリストの協会 府中中河原伝道所 武田光世 福田一彦 牧甫 木村雄二 目白ヶ丘教会 平井純子 目白ヶ丘教会(東北WG) 緑幼稚園 鈴木基行・鈴木真理 恋が窪キリスト教会 六角橋教会 頌栄教会 匿名(多数)

献金集計表(累計)

2019.8.9現在

	計	
	件数	金額
2011年	256	120,271,287
2012年	592	165,673,327
2013年	619	138,543,737
2014年	651	29,420,520
2015年	629	17,973,940
2016年	692	14,465,518
2017年	750	12,491,525
2018年	649	10,796,867
2019年	300	4,774,143
	5,138	514,410,864

	計	
	件数	金額
1月	65	888,558
2月	43	709,833
3月	67	887,386
4月	37	846,679
5月	29	569,367
6月	25	320,250
7月	27	393,808
8月	7	158,262
9月	-	-
10月	-	-
11月	-	-
12月	-	-
	300	4,774,143

(単位：円)

編集後記:「震災後10年で、様々な矛盾が噴出する、その時に、活動できる東北ヘルプであるかどうか」と、理事会で問われ、考えながらニュースレターを作成しました。校正をご担当頂いたN牧師をはじめ、本当に多くの方のご助力を得て、完成に至りました。このニュースレターこそ「教会のネットワークの賜物」そのものだと思います。心からの感謝を覚えています。



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

事務局長 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師・扶助基金実行委員会委員長）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

監事 本村大輔（救世軍杉並小隊長）

※肩書等は、すべて2019年7月末日現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP



Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6 食品放射能計測所「いのり」気付 ※住所が、変わりました。

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com